

# 槐かい

岡井省二創刊

平成24年8月号



平成二十四年八月一日発行 第百二十二巻第八号 通巻第 二五四号 (毎月一回) 一日発行  
平成三年九月十八日発行 雑誌記者協会の発行

# 冷奴

高橋将夫

百畳のどこに坐るも涼しけり  
ゆつくりと愉しみながら滴れり  
嬉々として老木の若葉かな  
新緑の風は希望をふくらます

孫きゆうに大人びてくる端午かな  
過去へワープす故郷の瓜畑  
主義主張なくてばつさり枝払ふ  
索麵の流るるごとく杞憂去る  
端居して心自在に飛び回る  
油照神は吾より短気なり  
情熱はさめることなし冷奴

# 槐安集

水野恒彦

夏暁や覚めてきのふの木の匂ひ  
言靈の消えて初蟬ふいに鳴く  
優曇華や暗きところの水を汲む  
芍薬や人に遅れて笑ひけり  
少年の身の内に棲む山淑魚

延広禎一

凌霄の花の懸橋宝相華  
夕日いま海に口付け夏神楽  
窯変の土鈴鳴りをり青葉木菟  
藤房開明文庫や御堂関白千年紀  
熨斗鮑新刊山梨之町文沢瀉咲ける日和かな

加藤みき

夏落葉くれなゐ一つ混じりあり  
肩を貸す男らの背に新樹光  
十葉の花叢の中観音堂  
牛の像なでて酷暑に備へたる  
はやばやと崩れてゐたる雲の峰

石脇みはる

鮎釣の帰ってゐたり魚籠に音  
生葉を煎じてをりぬ夏の宵  
大夕立同行二人の傘を打つ  
熊ン峰恐れ拂ひて空を切る  
五月雨や濡れ鼠また楽しかり



中島陽華

陽気なるいそぎんちやくと言ふべかり  
鳩魔羅<sup>くまらじゆう</sup>什高<sup>じゆうかう</sup>みの春のどんびかな  
らんまんの春や糸杉束にして  
シーザーの目くぼせ櫻吹雪かな  
伊勢にして揚巻<sup>あげまき</sup>貝に色つけてある

栗栖恵通子

ほうたるや書淫の眼あげにける  
くらがりに流されてゆく海月かな  
青嵐や革で研ぎたる一枚刃  
恐竜の背骨凸凹夏来たる  
さくらんぼ膝を揃へて兄いもと

竹内悦子

空つぼの壺に耳あり犬ふぐり  
浮舟に水溜りある柳かな  
大鋸屑<sup>おがくづ</sup>のこぼれてゐたる蟻の道  
鍋底に焦目ありたる夕焼かな  
蛇苺草むらに灯を点しをり

大島翠木

立夏夕焼自分が薄くなつてゆく  
黒人の靈歌五月の瓜を切る  
杜若鮎やはらかく鯉を追ひ  
己が影すきとほらせて水ゆく蛇  
青葉風マネキンの目が泳ぎ出す

雨村敏子

大空や瑞穂の国の茶摘唄  
金環<sup>きんか</sup>蝕<sup>く</sup>の中の暗闇明易し  
土の道海に続けり夏来たる  
道連れは行燈海月とまんぼうと  
更衣して新しき顔でゐる

本多俊子

たましひ匂ふ若葉の風のゆらぎゐる  
まほろばに石の顔して墓出づる  
風薫る眼とじれば美少年  
心音のやうな噴井のありにけり  
桃の花山羊のおつぱいしぼりけり

近藤喜子

菖蒲湯の夜は透明となる眠り  
万緑や大きく動く表情筋  
真つ青な光のシャワー鷹巢立つ  
ロザリオのきらめく風の青岬  
星々に繋がる青葉木菟のこゑ

谷村幸子

石仏の無言の行に笹粽  
夫と来て金剛峯寺の花檣  
花明かり墨色よしと写経する  
夏蜜柑の根方に灰をまいてをり  
空広く命みじかし花は葉に

瀬川公馨

酵母種のふゆるふゆる子どもの日  
巖松の繁殖力を問ふなかれ  
鶯のオオタニワタリすかしつ屁  
なに流の八刀八刀や時鳥  
這ひずつて昇天したる夏落葉

久保東海司

松苗の神事畏む雀の子  
綾取りの川かすめ舞ふ夕つばめ  
言の葉のしめるは殊に梅雨の葬  
正面の滝を見据ゑてしぶき浴び  
抱卵の鶏のまばたき涅槃西風

西村純太

時じくの死を思えば水鶏鳴く  
東雲や身に覚えなき薔薇の棘  
ああサロメ宴のあとの麦の秋  
卯波立ち幽かに聴こゆ鎮魂歌  
蜘蛛の糸やがて地獄の美しき網

中野京子

靄ごめの朝日にのまれ鯉幟  
モノクロをカラーに戻し薫る風  
老松と青嵐ばかり能舞台  
線描のみ仏なりし新樹光  
時々の色を含みて白牡丹

柳川 晋

空豆の日本にある突破力  
河口まで悉に見ゆる柿若葉  
夜振火にドガの踊り子飛び込める  
空に満つ光を削り氷菓とす  
いと深き闇の底なり井戸凌

岩下 芳子

天守より高きに住みて立夏かな  
つばくらめ土喰つて虫喰つて水のもんで  
鬼瓦の口の中なる雀の子  
新緑の色を分けたる山の形  
初夏の川の光を掬ひけり



# 槐市集

庄司久美子

踏切りのそばの祠や南風  
薫風やラセン階段かけのぼる  
樟若葉車座の子の笑ひごゑ  
一服の農夫の仰ぐ五月空  
花 檣 裏 参 道 の 谷 の 音

杉原ツタ子

苗植うる母に似て来し姉の背ナ  
春霞蓬萊山の賑々し  
力ある川風受くる幟かな  
薫風や吾子の瞳に大空の  
足跡を残す和綴や卯波立つ

鈴木初音

巢立ち鳥己生いてく懼れなし  
木々はざま飛翔みごと夏の蝶  
牡丹の花の静けさ耀けり  
夕虹を見る人の顔すがすがし  
これやこの初胡瓜もぐ河童かな

十川たかし

肺破るほどの拍動草とかげ  
バツハG線玄関先のアマリリス  
田を植ゑてやさしく曲る苗の列  
美しき日の出に衣更へにけり  
枝折戸を出づれば隣柿若葉



# 槐集

## 高橋将夫選

木下闇アリスの国へぬけるかも  
枚方 熊川 暁子

母の日の抽出にある陀羅尼助

口唇に絹の余韻の青メロン

鶉綱いま闇に白扇ひらきけり

玉杯に夢と落花と言の葉と

黒百合の隣の花を買ひにけり  
京都 竹中 一花

茉莉花の出窓より来る出雲そば

汗拭くや五爪の籠の和手拭

甘へつ子やんちやつ子寝て吊忍

屋上の菜園立夏の水流る

渦潮のきりりと夏を迎へけり  
岡崎 寺田すず江

翡翠の青一閃を曳きて消ゆ

美しき毘めぐらせて蜘蛛の糸

遠き世も一睡にして杜若

金環を繋ぐ一瞬蛇の衣

たまさかの牡丹日和や孫次郎  
岡崎 岩月優美子

ぼうたんの白に翳ありノクターン

新樹光憂さと侘しき剥がれゆく

真昼間の風の音聞く芥子坊主

広重の白雨は永久に降り続く

白薔薇に唇よせて吸ふエスプリ  
犬塚李里子

前世の闇抜けて来し黒揚羽

青年の未来図を聴く朱夏の晴

棕櫚の花かがやき瑞兆かと思ふ

卯の花腐し心底水の音のする

水あふれ光あふるる春祭  
摂津 中田 禎子

鉛色の藤椅子にある匂かな

青梅やミツシヨンスクール通学路

ひなげしに和紙の手触りありにけり

著我の花大物主神の通ひ路

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」観照

玉杯に夢と落花と言の葉と 熊川 暁子  
玉杯に受ける夢と落花と言の葉。旧制高校の寮歌が思い出される。朴歯の下駄とマントの寮生の夢と情熱、戦争に散った若者達の夢、ダンテの奇才とハイネの詩：そんなもろの夢と情熱が脳裡に浮かぶ。

〈木下闇アリスの国へぬけるかも〉は「木下闇」という古典的な闇から「不思議の国のアリス」というメルヘンの世界へワープするところがユニーク。

黒百合の隣の花を買ひにけり 竹中 一花  
黒百合は恋の花。わざわざ黒百合の隣の花というところがおもしろい。買ったのは清楚な花ではなからうか。

〈汗拭くや五爪の龍の和手拭〉。「五爪の龍」は昔の中国で皇帝のみが象徴として使うことができたという龍。そう聞くと何だか使うのがはばかられそう。

美しき畏めぐらせて蜘蛛の糸 寺田すず江  
蜘蛛の巣は虫を捕らえる罫だが、それを「美しい罫」と把握したところに共鳴。確かに美しい。

広重の白雨は永久に降り続く 岩月優美子  
安藤広重の浮世絵に夕立の中を人が駆けて行く景がある。「東

海道五十三次」等是不朽の名作で白雨は永久に降り続く。

白薔薇に唇よせて吸ふエスプリ 犬塚李里子  
エスプリは精神、機知。白薔薇に唇をよせて、蜜ではなくその精神、才知を吸ってしまうのである。

水あふれ光あふるる春祭 中田 禎子  
故郷の氏神さんでは春と秋に祭があつたが、秋祭はなんとなく寂しく、春祭は賑やかだった。確かに春祭は光と水に溢れていたと形容できるかもしれない。

ふんわりと生気をもらふ若楓 犬塚 芳子  
楓の若葉のなかにいて生気を感じ取るわけだが、「ふんわり」その情景をさりげなく描いている。

初対面に気心を知る風信子 谷岡 尚美  
初対面にして気心がわかり合えたというから、相性がよかったのだろう。風信子はヒヤシンス。ヒヤシンスならクールな語感、風信子なら風の便りを感じさせる。

白牡丹半身くづる程白し 前田美恵子  
大輪の白牡丹は豪華だが、重たげでもある。「半身が崩れるほど」という感覚もおおいに納得できる。

藤浪に花虻あまたゆりゆられ 近藤 紀子  
藤房の周りを虻が飛び交っている景。「ゆりゆられ」：虻が房にとまって藤がゆれ、藤の房が揺られて虻も揺れる：そんな自力、他力の世界が見えてくるようだ。

(以下略)